

Title	近代名古屋の形成と矢田績：慶應義塾と三井銀行
Sub Title	The formation of modern Nagoya and Yada, Seki
Author	橋口, 勝利(Hashiguchi, Katsutoshi)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2025
Jtitle	近代日本研究 (Journal of modern Japanese studies). Vol.41, (2024.), p.75- 103
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 近代日本の地域社会・業界と慶應義塾：ローカル・リーダーの視点から
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20240000-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近代名古屋の形成と矢田績

——慶應義塾と三井銀行——

橋 口 勝 利

一 はじめに——知られざる「名古屋の恩人」

本稿の課題は、近代の名古屋の財界形成、および工業化を、矢田績の活動に注目しながら検討することである。

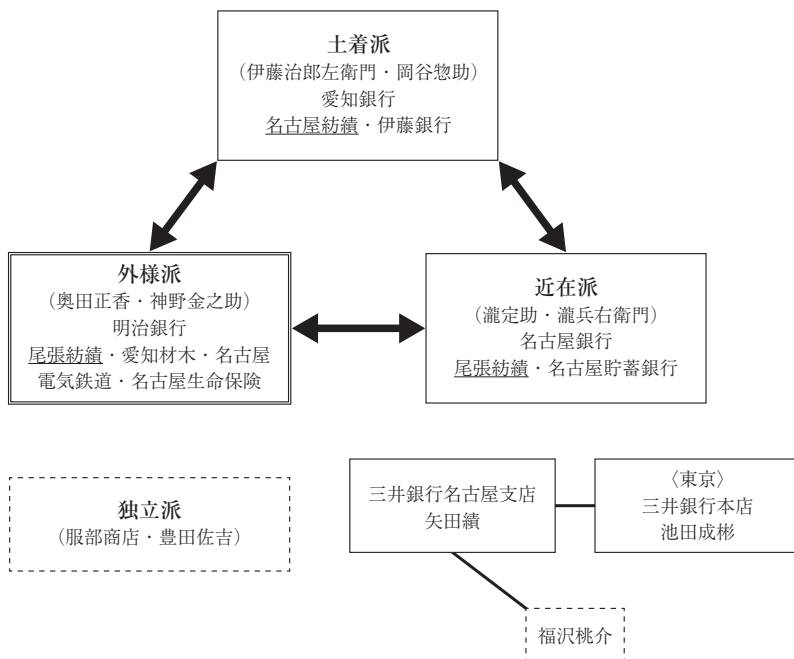
名古屋の財界形成については、明治期から大正期の工業化の時代を対象に、三つの資産家グループ形成が論じられている。⁽¹⁾ この研究によれば、三グループが名古屋の工業化を牽引していたことが指摘される。とくに「名古屋の渋沢策」⁽²⁾ 奥田正香を中心とするグループが、紡績事業を中心に台頭したことも解明されている。

本稿は、このように形成された名古屋の工業化を論ずるにあたって、二つの論点を提供したい。一つめは、三つのグループが形成されたのちの一九一〇年代以降の中京圏、および名古屋の産業界を解明するという問題である。つまり、これまで注目されてきた三つのグループが名古屋の発展にどう関与するかということである。

実際にこの時期は、三グループの競争や結合、そして再編がすすむなかで、新興勢力の豊田織機・服部商店が台頭するなど名古屋財界の変動期にあたっていた。こうした新潮流を合わせて、中京圏の財界形成を評価したい。次の視点は、慶應義塾の役割に着目することである。一九一〇年代から慶應義塾の出身者は、各地の政財界で活躍を始めるが、本稿の主人公となる矢田績は、慶應義塾の卒業生で名古屋にて活動し、中京圏・名古屋の工業化（大都市化）に重要な存在となっていく。それゆえ本稿は、一九一〇年代―一九二〇年代の中京圏を舞台に、矢田の活動に注目しながら検討を加えていくのである。

矢田績は、『中京名鑑』に、「中京財界が君（＝矢田績…筆者）に依つて受くる処の裨益も亦尠からず⁽³⁾」と評されたように、名古屋財界形成の功労者の一人であった。杉浦英一は、名古屋財界のグループでは、矢田を奥田正香の「外様派」に分類した（図1）⁽⁴⁾。しかしながら、朝井佐智子が指摘したように、矢田はこのグループの範囲にとどまらず慶應義塾の学びを活かし、名古屋の工業化に貢献した⁽⁵⁾。本稿では、朝井の研究成果を基盤にしなが、中京財界の展開を論じていきたい。

図 1 名古屋の 3 グループ (概念図)



出所) 杉浦英一『中京財界史』中部経済新聞社、1956 年をもとに、筆者が一部修正して作成。

二 矢田績と慶應義塾——福沢、中上川との出会い

(1) 和歌山で生まれる

本節では、矢田績の出生と慶應義塾での在学生生活、そして実業家へと進む過程を論じていく。

矢田績は、一八六〇（万延元）年に、和歌山県の医者・谷井清雄の次男として生まれた。兄の谷井保は、和歌山県選抜で鎌田栄吉と共に上京し、一八七四年に慶應義塾に在籍した。そして一八八〇年に横浜正金銀行へ入行したのち、一八八二年に三菱会社へ移籍、そしてのちに日本郵船神戸支店長へ就任するという実業家の道を歩んだ。⁽⁶⁾なお矢田績は、和歌山県新宮の矢田市左エ門（紀州新宮藩家老）の養子に迎えられ、士族・矢田姓を名乗った。⁽⁷⁾

(2) 慶應義塾での生活

① 慶應義塾への入社

矢田績は、実兄・谷井保の影響から一九歳で慶應義塾へ入社した。『慶應義塾入社帳』には、時期は明治一三年一月二六日で、年齢は一九歳五か月、本塾教員…鎌田栄吉と記録されている。⁽⁸⁾本塾教員の鎌田栄吉は谷井保と同窓で、のちに慶應義塾長に就任するが、和歌山県と同郷の先輩にもあたっていた。慶應義塾での就学状況は、矢田績の記録に、その学習内容、同窓生、そして成績が詳細に記されている。

「私は郷里の英学校では已に相当の学力が出来てチトレルの万国史やバックルの文明史位は容易く読んで居たので慶應義塾へ入学の際最初から二等生に採用された（傍線…筆者）⁽⁹⁾」

「私はミルの経済論や代議政体論やスペンサーの社会論やスペンサーの代議政体杯^{など}毎日門野先生の講義を聴いたのである。」⁽¹⁰⁾

「同級生は廿七八人であつたが其中に後年大政治家となり遂に総理大臣となつた犬養毅君も居たのである（傍線…筆者）⁽¹¹⁾」

「犬養君洪江君矢田、この三人が常に首席を争つたのであります（傍線…筆者）⁽¹²⁾」

「抽斎（＝洪江抽斎…筆者）歿後の第二十二年は明治十三年である。保（＝洪江保…筆者）は四月に第二等に進み、七月に破格を以て第一等に進み、遂に十二月の全科の業を終えた。（中略…筆者）⁽¹³⁾上等の同学生には犬養毅さんの外、矢田績、安場男爵があり……（以下略。傍線…筆者）⁽¹³⁾」

以上の記録から矢田は、二等生として入学し、J・S・ミルやスペンサーなど、経済学や社会学を学んだ。その後、すぐに一等生へ昇格し、優秀な成績を収めて在学二年で卒業した。同級生には犬養毅や洪江保が在籍したという。⁽¹⁴⁾当時の慶應義塾では、矢田は卓越した存在であった。

② 福沢との出会い

矢田績は、福沢諭吉の薫陶を直接、そして熱心に受けており、回想にもその様子がよく記されている。

「その時分に慶應義塾の学生がどれ位ひ居つたかと云ひますと僅か二百人から三百人位ひでした、(中略…筆者) 自然に福沢先生に親しく接するという機会が多々あつたのです。私の如きは福沢先生のところへ成るべく頻繁に接近するやうに勉め種々御教示を受けて居つたのでありますが。(以下略、傍線…筆者)⁽¹⁵⁾」

矢田は、福沢から、英語だけでなく政治経済、弁論や文章の重要性など多岐にわたって学んでいた。加えて矢田は、在学時に名古屋での演説を福沢から指示されており、能力は高く評価されていた。⁽¹⁶⁾

(3) 卒業後の活動——ジャーナリストから実業家へ

① 卒業後の道 (表1)

矢田績は、一八八一年に慶應義塾を卒業後、福沢の斡旋で慶應義塾の寮長として後輩学生の指導にあたった。そして翌一八八二年、福沢が「時事新報」を創刊した際には編集局員に就任し、社説の執筆(一週間に一回)を担当してジャーナリストの道を歩み出した。⁽¹⁷⁾一八八四年には、福沢・中上川彦次郎の勧めがあつて「神戸又新」創刊時に主筆として移籍して慶應義塾を離れた。⁽¹⁸⁾一八八七年には、内海忠勝(兵庫県知事)、牧野伸顕の勧誘に福沢の勧めがあつたため、兵庫県勸業課長へ就任し行政職の道へと進んだ。⁽¹⁹⁾

表 1 矢田績の関連年表

年	年齢	場所	事項	
1860	0	和歌山	谷井家（医者）の次男として誕生（和歌山）。谷井保（慶應義塾）の弟。	和歌山時代
1878	18		矢田家へ養子（紀州新宮の士族）	
1880	20	東京	慶應義塾へ、二等生で採用。すぐに一等生へ。	慶應時代
1881	21		慶應義塾卒業。福沢諭吉から学生指導を依頼される（月給 10 円）。	
1882	22		福沢のもと、時事新報へ入社（月給 20 円）	
1884	24	神戸	福沢の勧めで神戸又新日報社へ入社、主筆。	
1887	27		兵庫県勸業課長	
1888	28		中上川彦次郎の招聘で、山陽鉄道運輸課長へ。	
			上遠野富之助（のちの名古屋商工会議所会頭）と出会う。	
1889	29	名古屋	鉄道 100 マイル達成祝賀会へ出席（名古屋）	実業家への道 中上川 の存在
1890	30	神戸	中上川は山陽鉄道会社株主と対立。矢田は減俸（月給 120 円→96 円）。	
1891	31		中上川とともに山陽鉄道を退社。	
			上神戸電燈社を設立。	
1895	35	東京	武藤山治からの誘いで、三井銀行へ。秘書主任。	
1897	37	京都	三井銀行京都支店長へ就任。	名古屋時代①
1899	39		三井銀行横浜支店長へ就任。	
1901	41	横浜	中上川彦次郎が死去。	
1904	44		千代田生命相互会社の設立へ奔走（慶應出身者の会社）	
1905	45	名古屋	三井銀行名古屋支店長へ就任。	
			名古屋三田会の発足が表明される。	
1906	46		名古屋三田会、発足式。	東京時代
1915	55	東京	三井銀行監査役に就任。	
			三井合名会社監査部員へ就任。	
1916	56		東神倉庫（株）常務取締役へ就任。	
1921	61	名古屋	三井を退職。	
			東神倉庫（株）取締役へ就任。	名古屋時代②
1922	62		名古屋へ帰還。東区撞木（しゅもく）町に居を構える。	
			瀧定助らから名古屋市長就任を打診されるが断る。	
1923	63		名古屋市臨時調査会を設立。	
1925	65		財団法人名古屋公衆図書館を設立。	
			東邦電力（株）監査役へ就任。	
1926	66		慶應義塾評議員へ就任。	
			名古屋公衆図書館理事長へ就任。	
1934	74		東邦電力（株）名誉顧問へ就任。	
1935	75		東邦電力（株）顧問へ就任。	
1940	80		死去	

注）『懐旧瑣談』を基に筆者作成。

資料）矢田績『懐旧瑣談』1937 年、慶應義塾 150 年史資料集編集委員会『慶應義塾 150 年史資料集 1』慶應義塾、2012 年。

②中上川彦次郎への傾倒

矢田績は、福沢のもとでジャーナリストとなったが、兵庫県勸業課長就任を機に、実業界へと活動の主軸が移っていった。この先導役となったのは、中上川彦次郎であった。矢田は、中上川（慶應義塾出身・福沢の甥）とは、時事新報の時代から活動を共にしていた。中上川は、山陽鉄道の社長に就任するに伴って、一八八八年に矢田を運輸課長として招聘したのである。矢田の回想によれば、

「そこで中上川がやつて来て、こんど神戸下関間の鉄道を敷設したいと思ふ、是非君達にも尽力して貰はなければならぬというお話です。（傍線…筆者）⁽²⁰⁾」

そして一八九五年、中上川が三井銀行へ移籍するに伴って、矢田も三井銀行へ入行し行動を共にした。⁽²¹⁾

「私も中上川氏に続き山陽鉄道をやめまして三四年神戸に残つてをりましたが、明治二十八年に三井銀行へはいりました。⁽²²⁾」

つまり矢田は、慶應義塾、福沢のネットワークを基盤にしながら、実業家、バンカーとしての道へと踏み出した。とくに、中上川が矢田の実業家人生に強い影響を与えた。中上川は、関西経済の発展（山陽鉄道の敷設）や三井系企業（物産・銀行・紡績）の組織改革に相次いで着手し、関西地域の近代化を牽引するが、矢田を実業家そしてバンカーとしても期待した。矢田は、中上川の右腕として実業家としての能力を蓄積したので

ある。

③福沢諭吉の死と慶應義塾の再建案

実業家としての道を歩んだ矢田績は、その自身の職経験を踏まえ、慶應義塾の運営にも強い改革案を發するようになった。一九〇一年二月三日の福沢諭吉の死から間もない二月一日に、矢田は、「慶應義塾改革ノ議」を「塾員 矢田績」として發表した。⁽²³⁾その文頭には、「嗚呼我社頭福沢先生ハ逝ケリ先生ガ此世ニ遺サレタル事業甚タ多シ」とし、福沢諭吉の功績を称えている。しかし内容は、慶應義塾の今後の経営不安を強く訴え、改革を迫るものだった。その内容は、帝国大学との学生獲得競争に劣勢にあるという危機的状況を指摘し、大学の閉鎖と普通部教育の充実を図るといふ抜本的な提言だった。矢田は、義塾に学生が集まるのは、「先生其人ノ徳ヲ慕フテ門下ニ來ルモノナルベシ」と、福沢の影響力の強さが大きな要因であったと指摘した。それはつまり、福沢亡き後の大学の学生募集に強い不安を示すものであった。それゆえ矢田は、大学部を廃止して普通部を充実させ、将来は、実業界で活躍させることが解決策だと訴えた。「慶應義塾改革ノ議」には、

「福沢先生の宿論たる学問的実務家ヲ多ク世ニダサントスル」⁽²⁴⁾

「義塾ハ小数ノ学者ヲ作ルヨリモ学問的頭腦ヲ有スル仕事師ヲ多数ニ作りタキモノナリ」⁽²⁵⁾
ビジネスマン

と記し、慶應義塾の学問的な知識を実業界に活かすことができる「学問的実務家」を、多数輩出しなければ

ならないと主張したのである。

三 矢田績と名古屋——近代化への転換点（一九〇五年—一九一四年）

（一）矢田績と名古屋

矢田績が名古屋の近代化に関与するのは、三井銀行名古屋支店長への就任が嚆矢となった。

「二十八年東上して三井銀行に入り、本店秘書主任、庶務課長、深川、京都、横浜の各支店長を経て名古屋支店長となり（以下略・傍線…筆者）⁽²⁶⁾」

矢田は、本店、深川、京都、横浜と三井銀行では主要店舗の支店長を歴任し、順調な出世街道にあった。そのなかでの名古屋支店長就任であった。しかし矢田は、自身の回想で名古屋支店長赴任を「左遷」と受け止めた。

「明治廿八年私は三井銀行名古屋支店長を命ぜられた、私は已に京都、横浜等の大支店長を勤めたので其の時はマダ中都市であつた名古屋の支店長に転勤は私として不満不平で一種の左遷と直感するのは勿論であるが（中略…筆者）名古屋の三井銀行は（中略…筆者）三井部内で廢店論が起つたのである（傍線…筆者）⁽²⁷⁾」

矢田績は、三井銀行の主要店舗の舵取りを任され続けていたため、名古屋支店長への赴任は不満不平で、この人事措置を「左遷」と受け止めた。矢田が名古屋への転勤に不満だった理由は、当時の名古屋の都市形成が極めて不十分なことにあった。つまり、名古屋はインフラの未整備や旧弊の悪い慣習が残存して都市化が遅れ、三井銀行名古屋支店は廃店の方針がとられていた。それゆえ矢田にとっては、名古屋赴任は「不満」であり、「巻き返し」の場となったのである。⁽²⁸⁾

(2) 一九〇五年の名古屋——中京財界の三グループ

矢田績が名古屋支店長となった一九〇五年は、中京財界の大きな転換期であった。中京圏の近代化を主導した資産家グループの対立が激化し、対立と協調が繰り返し展開されていたからである。図1は、その中京財界の構図を示したものである。当時の名古屋は、土着派、近在派、外様派の三グループに分かれており、それぞれ愛知銀行、名古屋銀行、明治銀行を拠点として覇権争いが繰り返された。この勢力争いのなかで、一九〇五年から一九〇七年にかけて「名古屋の渋沢栄一」奥田正香が台頭した。奥田正香は、外様派の中心人物として名古屋で近代産業の設立を次々とおし進めた。紡績事業では、尾張紡績（外様派・近在派）と名古屋紡績（土着派）、そして三重紡績の合併を、奥田は渋沢栄一と連動して実現し、経営の主導権を握っていくなど、中京財界を代表する存在に登り詰めた。矢田は、この三グループそれぞれの特徴を的確に把握していた。

「伊藤、岡谷両氏はどこと無く長者の風であり謙虚の人であつた、瀧兵右衛門氏は商人肌であり神野（じんのすけ）金之助氏は相当胆力もあり立志伝中の人らしく見受けられた、奥田正香氏は才幹人に優れ新進の気分を飲

み込み事業家のタイプであり、上遠野氏は新聞記者上りであるが能く奥田氏の為にサービスに至らざる無く夫が為め取り立てられたのである（傍線…筆者）⁽²⁹⁾

つまり土着派の伊藤・岡谷は、近世来の特権的地位にあり、近在派の瀧兵右衛門は近代に入って名古屋へ進出した商人的性格を有していた。外様派の奥田正香は、才能や企業家精神が旺盛で新事業へ進出して近代化をリードする存在と評したのである。⁽³⁰⁾

（3）矢田績の問題意識

矢田績は、近代化が進みつつあった名古屋に対しては、批判的な見解を有していた。これは、名古屋の資産家の行動様式に、「閉鎖性」と「グループ形成」が色濃く見られたからであった。

まず名古屋の「閉鎖性」について、矢田は以下のように評した。

「会社の重役の如き兎角天の一方より天降る事が多い例えば昨日迄某鉄道会社の社長たりし人が今日は銀行の頭取である。（途中略…筆者）畢竟コレハ我国にては経験と云ふ事に余り重きを置かぬ証處であつて、門地系統が勢力を占め其事業に無経験な全く不知案内の人でも好機に触るれば忽ち其事業を主宰すると云ふは我国の実業界が未だ幼稚なる故であらう。（傍線…筆者）⁽³¹⁾

「余が名古屋へ来た当時は名古屋人は兎角土着根性が強いので排外と云ふか排他と云ふか外来人を喜ばぬ

風が却々盛んであつた、此弊風悪習を除去しなければ到底名古屋の發展進歩を見る事は出来ないと思つた
(傍線…筆者)⁽³²⁾

矢田績は、経営者が実力や経験の無いままに天下り形式で就任することを指摘し、さらに「土着根性が強く」て排外的であつたとも断じた。加えて矢田は、この名古屋の旧弊の原因である資産家グループの閉鎖性にも批判的であつた。

「日本には、重役兼職の弊がある此弊は疾くから喧しく言はれて居るのであるが、今尚は一掃されないのみならず、或は益々盛ならんとするのは寒心に堪へない次第である(傍線…筆者)⁽³³⁾」

このため矢田は、名古屋の旧グループの解体と、新興勢力の育成を、三井銀行名古屋支店長としての方針とした。

(4) 中京財界の転換点——奥田正香の財界引退

一九一三年、中京財界を揺るがす稲永疑獄事件が発生した。これは名古屋での遊郭移転をめぐる土地不正売買の疑惑が、愛知県知事や奥田正香にまで及び、中京財界全体の大事件となつたのである。結局、奥田正香は無関与とされたが、この事件を機に奥田は財界を引退した。この事件を受けて矢田績は、名古屋財界の改革の契機だと主張した。

「名古屋実業界も近來頗る放漫のことありたるも今次の事件突発し人心漸く緊縮し真面目に向んと為し居るは寧ろ慶賀すべく名古屋実業界の前途樂觀して可なるべき云々（傍線…筆者）⁽³⁴⁾」

矢田は、この事件を機に、実業家・バンカーとしての力を發揮して、名古屋の近代化を牽引していくことになった。

四 名古屋の「大都市化」——新興勢力の台頭（一九〇五年—一九一四年）

（1）名古屋支店長時代——三井銀行の改革

矢田續は、三井銀行名古屋支店長として、三井銀行の経営改革に取り組み、名古屋支店の躍進を目指した。

一九〇五年一月の「名古屋支店長報告」⁽³⁵⁾には、矢田が、「名古屋支店ハ不健康体ノ支店テアル」「其私力亦御承知ノ數医者テアリマスカラ」と、経営不振の名古屋支店を、自身が医者として手術したことが記録されている。ただし、その一方で矢田は、「名古屋ノ各銀行ノ競争ノ実ニ激甚ナルコトハ全ク想像以上デアリマス」と、名古屋銀行界の預金・融資競争が激しく、三井銀行が劣勢であることも報告した。

預金面では、当時の名古屋全体で約一八〇〇万円の規模であったが、一位は明治銀行（二八八万円）、二位は名古屋銀行（二五四万円）、三位は愛知銀行（二〇六万円）が上位を占めた。しかし三井銀行は五位（二二九万円）にとどまっており、矢田は、「情ケナイ有様デアリマス」とその劣勢を嘆いた。

さらに貸金は、名古屋全体で約二二〇〇万円のうち、一位は明治銀行（四六〇万円）、二位は名古屋銀行

(三四五万円)、三位は愛知銀行(三二八万円)が上位であった。しかし三井銀行は七位(六三万円)とさらに低位にとどまっております、「三井銀行ハタツタ六十三万円シカ貸シテ居ラヌ」と融資事業の不振も、矢田は問題視した。

矢田續は、名古屋支店の低迷の要因を、「名古屋ハ金利カ安イヂヤナイカ、貸シテモ好クハ貸セヌ」という三井銀行本店の融資方針に求めた。つまり、三井銀行は、金利の高い地域での融資を優先する方針をとっていたため、貸出金利の低い名古屋では、融資には消極的な姿勢にとどまっていたのである。

しかし矢田續は、名古屋の工業化を高く評価していた。「名古屋ハ全国ノ紡績会社ノ七分ノ一ヲ占メテ居ル、決シテ小サイ仕事テハナイ⁽³⁶⁾」、そして「陶器ガ近年世界的ニナツテ居ルコトデアリマス⁽³⁷⁾」と、矢田は、紡績業や陶磁器業が、名古屋で発展していることを評価した。そこで矢田は、名古屋支店長の裁量拡大を得るために、三井銀行の「支店制度」の改革を提言した。

「三井銀行ノ名古屋支店ヲシテ名古屋支店ヲシイモノニスルニハ、支店長ノ権能ニ特別制度ヲトツテ、モウ少シ自由ヲ与ヘテ下サル御方針テナケレバ、到底名古屋支店ハ今日ノ不振ヲ恢復スルコトハ出来ヌト考ヘマス⁽³⁸⁾」

つまり矢田續は、中央集権的な三井銀行の経営方針を批判し、支店長の融資への裁量を求めたのである。⁽³⁹⁾

(2) 新興勢力の育成

矢田績は、バンカーとして新興勢力の育成にも着手した。中京圏では近代化の進展に伴い、繊維産業の興隆がめざましかった。そのなかで、国産織機の開発を手掛けた豊田佐吉と綿布商人の服部兼三郎を見出し、積極的に支援したのである。

「佐吉氏は斯く機械の改良や工場の経営に没頭したが其間金融上の苦心は一方ならず（中略…筆者）私も銀行家として相当の助力を与えたのである。（傍線…筆者）」⁽⁴⁰⁾

つまり矢田は、豊田佐吉の紡績事業、織機械製造業を資金面からバックアップした。そして服部商店は、後年に日本最大の輸出綿布商社へと成長を遂げるが、矢田は、創業者の服部兼三郎の経営手腕を高く評価していた。⁽⁴¹⁾

「新進気鋭、積極的人であつて斯界に雄飛せんとする気概に満ちて居た」⁽⁴²⁾

「服部氏は夙に三井銀行と取引あり服部商店はマダ小規模であつたが仲々の敏腕家で将来大に為すあるの男と見込み私は相当の援助を与へたのである。（傍線…筆者）」⁽⁴³⁾

このように矢田は、一九一〇年代以降、新勢力として台頭してきた豊田佐吉、服部兼三郎の将来性に期待して、バンカーとして積極的に融資し、名古屋財界を育てたのである。⁽⁴⁴⁾

(3) 福沢桃介の登場——インフラ事業への進出

電力事業へは名古屋電灯への関与を通じて進めた。矢田績は、慶應義塾の同窓生の福沢桃介を呼び込み、名古屋のインフラ整備へ乗り出した。

「検査役として名古屋電灯の内容を巨細もろさず調査することの出来た矢田は、その会社の予想外に良いことを知り、ひそかに桃介に注進して、名古屋電灯への進出を進めたのであった。⁽⁴⁵⁾（傍線…筆者）」

矢田は、福沢桃介を名古屋へ呼び込んで名古屋電灯の社長に就かせることで、名古屋の工業化の基盤を整えたのである。⁽⁴⁶⁾そして一九一五年、矢田は三井銀行監査役に就任し、名古屋を離れることになった。⁽⁴⁷⁾

五 名古屋復帰後の矢田績（一九二一年—一九四〇年）

(1) 矢田績の帰名

一九二一（大正一〇）年、矢田績は三井家から離れたのち、名古屋へ戻ることを選択した。

「将来大阪に次ぐ大産業地として有望の土地柄であるが上に（中略…筆者）旁名古屋に於て何か社会的仕事に着手せんと、十年春東京を立退き七年ぶりに名古屋に帰住したのである（傍線…筆者）⁽⁴⁸⁾」

矢田は、名古屋が産業都市に成長しうる可能性を見出していた。名古屋へ戻ってからは、瀧定助や当時の名古屋市会議長から名古屋市長就任の要請を受けたが、矢田はこれを断っており、主として社会的事業に取り組んでいた。⁽⁴⁹⁾

（2）矢田績の社会貢献——「人」と「知」の交流拠点

①異業種交流拠点を形成——「開かれた」名古屋を目指す

矢田績は、中京財界の「閉鎖性」を打破するために、「人」と「知」の交流拠点を構築に力を注いだ。矢田績は撞木町の自宅に政官財の人々を集め、「撞木町倶楽部」を創設した。⁽⁵⁰⁾

「土着派でも近在派でもなく、かといって桃介派に近づくことをよろこばぬ外様の独立諸派といつてもいい、人たちが、こゝを寄り場にするようになった（傍線…筆者）⁽⁵¹⁾」

矢田は、旧三グループ、福沢桃介派と一線を画した「開放的な」関係性を構築した。⁽⁵¹⁾そして一九二三年、川崎卓吉名古屋市長のもと、名古屋市臨時調査会を設立し、関東大震災後の名古屋の産業発展を議論した。この調査会は、川崎、上遠野、矢田の発起人で、この後継団体として「土曜会」の設立につながった。⁽⁵²⁾矢田は、こ

うした「人の交流拠点」を築くことで、名古屋の大都市化を目指したのである。

②公共図書館の設立へ奔走——社会的事業へ

矢田績は、一九二五年に、私財を投じて名古屋公衆図書館を設立した。これは、名古屋の「知」の交流拠点と言えるものであった。その設立の目的は人材育成にあった。

「今の世相を見渡して青年の常識啓発の為又思想善導の為読書機関を設置するの必要を痛感し聊かながら私財二十五万円（其後更に二十余万円）を投じて成立したのは財団法人名古屋公衆図書館で（傍線…筆者）⁽⁵³⁾」

「名古屋市は人口七十万を算へ、歴史的一大都市であるが、市民の読書機関としては市立図書館一個あるのみ、（中略…筆者）是非共青年に読書の風を奨励したい（傍線…筆者）⁽⁵⁴⁾」

矢田績は、市民、とくに若者への教育事業に尽力し、この人材育成を通じて、名古屋への貢献を目指したのである。そしてこの図書館の設備は、国内屈指の規模と蔵書を誇った。

「さすがは矢田氏が「聊か奮発した積りである」と云ふ建築だけあつて、新式鉄筋コンクリート三階建の立派なものだ、公開食堂と売店に宛^{あて}られる（傍線…筆者）⁽⁵⁵⁾」

「日本としては斯うした大きい図書館は実に同館あるのみで正に名古屋市が誇りとすべきものである（傍線…筆者）⁽⁵⁶⁾」

「其れに設立者矢田續氏が実業家の出身だけに将来名古屋産業発展の為に実業に関する図書は普通図書館の行き方と違つた内容と数とを持つて居る（傍線…筆者）⁽⁵⁷⁾」

名古屋公衆図書館は、経済経営に関する文献を豊富に所蔵していたから、名古屋実業界にとっては、発展の礎となるものであった。矢田續は、自らが「閉鎖的」と評した名古屋に、「開かれた」公共図書館を設けることで、名古屋の大都市化を目指したのである。

（3）名古屋の「大都市化」へ——財界人・矢田續の活躍

矢田續は、三井銀行の職歴を活かし、一九一〇年代に続いて中京圏の産業育成にも、直接・間接的に関与した。名古屋財界の新興勢力の育成、日本綿業の統制を議論する「場」の設定、そしてインフラ事業への貢献である。

①新興勢力への関与——バンカーとしての役割

服部商店と豊田紡織へは、一九二〇年代以降も積極的に支援した。表2に、三井銀行名古屋支店の融資額が示されている。これによれば、三井銀行名古屋支店は、服部商店、豊田系企業への融資を重視しており、総じ

表 2 三井銀行の主要貸出先の推移（紡織業）

企業名	取扱店	1929年	1930 年		1931 年		1932 年		1933 年	
		12月末	6 月末	12月末	6 月末	12月末	6 月末	12月末	6 月末	12月末
明治紡績	若松	2,020	1,920	1,920	1,920	1,920	1,920	1,920	0	0
和歌山紡織	西	1,500	467	0	0	0	0	0	0	0
倉敷紡績	大阪	1,500	1,500	1,300	1,300	0	550	100	0	0
宮本物産	名古屋	374	237	250	266	173	168	32	20	7
豊田押切紡織	名古屋	328	460	214	186	161	154	155	256	89
鐘淵紡績	神戸・大阪	263	488	107	270	94	169	258	566	17
服部商店	名古屋	67	561	657	645	653	824	383	71	79
愛知織物	名古屋	0	320	531	380	455	459	384	261	359
豊田紡織	名古屋	0	0	350	210	130	0	0	0	0
東洋棉花	大阪	0	0	0	496	1,156	6,924	49	177	393
その他		1,544	1,119	644	466	530	809	613	764	1,601
合計		7,596	7,072	5,973	6,139	5,272	11,977	3,894	2,115	2,545

注 1) 三井銀行の紡織業関係の貸付先のうち、主要なものを取り上げた。

注 2) 単位は、「千円」。

資料) 『三井銀行史料 5 規則・資金運用』日本経営史研究所、1978 年。

て繊維関係への関与が強まっている。

三輪常次郎（服部商店の経営者）の『當用日記』には、矢田績と定期的に決算報告や経済界の動静の情報交換が行われていたことが記されている。

「矢田氏へ決算の報告。10%の配当をしては如何と言う。（中略…筆者）矢田氏が三井合名の有給6000円年俸の参事となった。東京瓦斯の顧問になったこと等話をされた。」⁽⁵⁸⁾

②日本綿業飛躍の舞台へ——「場」の提供

名古屋公衆図書館は、日本綿業の統制をめぐって会議場（対英・対英印・対蘭印・対米・対豪との貿易交渉）としても活用された。三輪常次郎は、日本綿業界の代表としてこの会議の記録を残している。

「矢田氏の図書館三階にてジンス（綿布の一種…筆者）統制の懇談会がある」⁽⁵⁹⁾

つまり矢田が創設したこの図書館は、一九三〇年代の綿業貿易摩擦、綿業統制への議論（商工省、綿工連、織物産地）の「場」として機能していたのである。

③ インフラ事業への貢献——三井銀行本店への斡旋

中京圏で成長を遂げた東邦ガスの東京進出（一九二七年）に際しても、矢田績の貢献があった。東邦ガス初代社長の岡本櫻は、東京瓦斯証券の二〇万株（約一二〇〇万円）の買い入れを企図して、矢田に資金融通（約六〇〇万円）の斡旋を依頼した。矢田は、三井銀行本店の池田成彬（慶應出身）を取り次ぐために、岡本櫻の紹介状を作成した。この結果、三井銀行と三井信託銀行からの融資が実現することになった。⁽⁶⁰⁾これは、東邦ガスの飛躍につながっただけでなく、三井銀行の事業拡張が矢田の仲介によって実現したことを示すものであった。

六 おわりに——矢田績と名古屋

本稿は、近代の名古屋財界の形成、そして工業化を、矢田績の活躍に注目しながら論じてきた。その結論を三つにまとめて結びとしたい。

第一に、矢田績が慶應義塾での学びを実業界でどのように生かしたのかという点である。矢田は、慶應義塾に在籍して以降は、福沢諭吉や中上川彦次郎の影響と期待を受けて、ジャーナリストや実業家へと成長を遂げた。三井銀行で一九〇五年に名古屋赴任したことは、矢田にとっては人生の大きな転機となった。矢田は、こ

の人事を「左遷」ととらえたが、慶應義塾で学んだ実業家・矢田は、その慶應ネットワークを活用することを通じて、名古屋の工業化を推進していった。

第二に、三井銀行の矢田績としての功績である。矢田の中京圏での活躍は、三井銀行の名古屋進出を促進させた。矢田は、三井銀行本店へ支店長の裁量の拡大を要求した上で、名古屋支店の経営を改革した。そして名古屋の実業界を、三井銀行の融資先として確立させた。それだけでなく、東邦ガスの東京進出を資金調達面で支援したことは、三井本店、三井信託銀行の融資先拡大につながった。

第三に、矢田績の名古屋の工業化や都市化への貢献について論じたい。まず矢田は、「名古屋のポテンシャル」について以下のように述べている。

「名古屋が一大工業地たるの運命を有するは何人も疑はざる所にして名古屋は実に工業の発展に必要な凡ゆる要素を具備し居ればなり、曰く地理の關係曰く交通の至便曰く氣候の温和曰く物資の潤沢曰く電氣動力の發達其他一にして足らず而して勞力の潤沢、労働者の氣風の温和なる事も亦有力なる工業發展の要素なるべし（傍線…筆者）⁽⁶¹⁾」

つまり矢田績は、名古屋に対して大阪・東京に匹敵するような工業都市への要素を見出していたのである。しかしながら名古屋は大きな課題を有していた。それゆえ名古屋の工業化に向けて、①旧弊の除去と、②新興勢力（豊田、服部、桃介）の育成に取り組むことになった。そのため、専門経営者や新興産業の台頭、開放性ある人的および資金的なネットワークの構築を目指した。

そして名古屋の工業化を実現させたのには、新たな拠点、つまり「人」と「知」の交流拠点の創設へと尽力した。撞木町倶楽部は「人」、そして名古屋公衆図書館は「知」の交流拠点として機能した。こうして名古屋を「開かれた」都市へと導いたのである。この矢田の活動は、近代日本の工業化の担い手が、時代が進むにつれて、「地域の有力資産家や名望家」から、「専門知識や技術を有した人材」へと全国的にシフトし始めていたことを示している。矢田は、名古屋において、三井系と慶應のネットワークを連動させることで、名古屋を近代の流れに乗せていったのである。

〔付記〕

この研究は、JSPS 科研費基盤研究C「中京財界形成の史的研究」(二〇二二—二〇二三年 代表者…橋口勝利)、およびJSPS 科研費基盤研究B「産業技術の経路依存性からみた工業地域の競争力に関する比較研究」(二〇二二—二〇二五年 代表者…北川博史)による研究成果の一部である。

参考文献・資料

- 朝井佐智子「矢田績とその名古屋での「シゴト」 愛知東邦大学地域創造研究所『中部における福沢桃介らの事業とその時代』唯学書房、二〇一二年。
- 慶應義塾一五〇年史資料集編集委員会『慶應義塾一五〇年史資料集Ⅰ』慶應義塾、二〇一二年。
- 『財団法人 名古屋公衆図書館設立概要』
- 杉浦英一『中京財界史』中部経済新聞社、一九五六年。
- 鈴木恒夫・小早川洋一・和田一夫『企業家ネットワークの形成と展開』名古屋大学出版会、二〇〇九年。

日本経営史研究所『三井銀行史料 2 支店長会記録』一九七七年。

日本経営史研究所編『中上川彦次郎伝記資料』東洋経済新報社、一九六九年。

橋口勝利『近代日本の工業化と企業合併——洪沢栄一と綿紡績業』京都大学学術出版会、二〇一三年。

坂野鎌次郎『中京名鑑』名古屋毎日新聞社、一九二八年。

福沢研究センター『慶應義塾入社帳 第二巻』慶應義塾、一九八六年。

三田商業研究会『慶應義塾出身名流列伝』実業之世界社、一九〇九年。

三井銀行『三井銀行 100年のあゆみ』日本経営史研究所、一九七六年。

森鷗外『洪江抽斎』岩波文庫、一九四〇年。

矢田績『慶應義塾改革ノ議』一九〇一年二月一日（福沢資料センター所蔵）

矢田績『懐旧慢話』矢田績手記、一九二二年。

矢田績『穿き違への日本 附たり名古屋小言』扶桑社、一九三三年。

矢田績『福沢先生と自分』名古屋公衆図書館、一九三三年。

矢田績『懐旧瑣談』財団法人名古屋公衆図書館、一九三七年。

注

- (1) 鈴木恒夫・小早川洋一・和田一夫『企業家ネットワークの形成と展開』名古屋大学出版会、二〇〇九年。
- (2) 橋口勝利『近代日本の工業化と企業合併——洪沢栄一と綿紡績業』京都大学学術出版会、二〇一三年。
- (3) 坂野鎌次郎『中京名鑑』名古屋毎日新聞社、一九二八年、一二八頁。
- (4) 杉浦英一『中京財界史』中部経済新聞社、一九五六年。
- (5) 朝井佐智子『矢田績とその名古屋での「シゴト」』愛知東邦大学地域創造研究所『中部における福沢桃介らの事業』

とその時代』唯学書房、二〇一二年。

- (6) 三田商業研究会『慶應義塾出身名流列伝』実業之世界社、一九〇九年、五八五―五八六頁。
- (7) 福沢研究センター『慶應義塾入社帳 第二卷』慶應義塾、一九八六年、三〇四頁。
- (8) 福沢研究センター『慶應義塾入社帳 第二卷』慶應義塾、一九八六年、三〇四頁。
- (9) 矢田績『福沢先生と自分』名古屋公衆図書館、一九三三年、一六頁。
- (10) 矢田績『懷旧瑣談』財団法人名古屋公衆図書館、一九三七年、一七頁。
- (11) 矢田績『懷旧瑣談』財団法人名古屋公衆図書館、一九三七年、一七頁。
- (12) 矢田績『福沢先生と自分』名古屋公衆図書館、一九三三年、一六頁。
- (13) 森鷗外『洪江抽斎』岩波文庫、一九四〇年、二九二頁。
- (14) 森鷗外の史伝小説『洪江抽斎』にも、洪江抽斎の息子・洪江保の同級生として矢田績が登場している。
- (15) 矢田績『福沢先生と自分』名古屋公衆図書館、一九三三年、一七頁。
- (16) ただし、矢田は、同じく慶應義塾出身者の武藤山治・和田豊治と違い、海外留学を終生していない。
- (17) 矢田績『福沢先生と自分』名古屋公衆図書館、一九三三年、四二頁。
- (18) 矢田績『福沢先生と自分』名古屋公衆図書館、一九三三年、四六頁。
- (19) 矢田績『福沢先生と自分』名古屋公衆図書館、一九三三年、五三頁。
- (20) 日本経営史研究所編『中上川彦次郎伝記資料』東洋経済新報社、一九六九年、五三四頁。
- (21) 武藤山治からの誘いも影響した。
- (22) 日本経営史研究所編『中上川彦次郎伝記資料』東洋経済新報社、一九六九年、五三五頁。
- (23) 矢田績「慶應義塾改革ノ議」一九〇一年二月一五日（福沢資料センター所蔵）。
- (24) 矢田績「慶應義塾改革ノ議」一九〇一年二月一五日（福沢資料センター所蔵）。

- (25) 矢田績「慶應義塾改革ノ議」一九〇一年二月一日（福沢資料センター所蔵）。
- (26) 坂野鎌次郎『中京名鑑』名古屋毎日新聞社、一九二八年、一二八頁。
- (27) 矢田績『懷旧瑣談』財団法人名古屋公衆図書館、一九三七年、九七―九八頁。
- (28) 一九〇一年の中上川の死が、矢田績の人事措置に影響した可能性がある。
- (29) 矢田績『懷旧瑣談』財団法人名古屋公衆図書館、一九三七年、一〇一頁。
- (30) 矢田績は、上遠野との関係で奥田正香とつながった。ただし、矢田は奥田正香の考え方、手法とは「一定の距離」があったと考えられる。
- (31) 『新愛知』一九〇六年一月二七日。
- (32) 矢田績『懷旧慢話』矢田績手記、一九二二年、一二一頁。
- (33) 矢田績『穿き違への日本 附たり名古屋小言』扶桑社、一九二三年、一四五頁。
- (34) 「名古屋実業観」『扶桑新聞』一九一三年一〇月二四日。
- (35) 日本経営史研究所『三井銀行史料 2 支店長会記録』一九七七年。
- (36) 日本経営史研究所『三井銀行史料 2 支店長会記録』一九七七年。
- (37) 日本経営史研究所『三井銀行史料 2 支店長会記録』一九七七年。
- (38) 日本経営史研究所『三井銀行史料 2 支店長会記録』一九七七年。
- (39) 矢田績は、名古屋の工業化をおし進めるべく、紡績業への関与も強めた。矢田は、三井物産の約束手形をできるだけ安く割引くことを三井銀行本店へ提案した。三重紡績は三井物産を通して原棉買付を約束手形で行っていたからである。矢田は地元有力企業の三重紡績（尾張紡績・名古屋紡績を合併）の取り込みを目指したのである。三井銀行『三井銀行 100年のあゆみ』日本経営史研究所、一九七六年、一二五頁。
- (40) 矢田績『懷旧瑣談』財団法人名古屋公衆図書館、一九三七年、一二―一三頁。

- (41) のち、製菓会社の興和株式会社となる。
- (42) 矢田績『懐旧瑣談』財団法人名古屋公衆図書館、一九三七年、一〇五頁。
- (43) 矢田績『懐旧瑣談』財団法人名古屋公衆図書館、一九三七年、一〇五頁。
- (44) 三井系企業は、三井物産（紡織機の輸入）や東洋棉花（棉花の調達）など、総じて、中京圏の繊維産業の発展に貢献していた。
- (45) 杉浦英一『中京財界史』中部経済新聞社、一九五六年、一八二頁。
- (46) しかし、福沢桃介は名古屋電灯への関与に失敗し、名古屋を離れることになった。
- (47) 矢田績の名古屋での活動は、水面下で継続した。一九一九年、矢田は紡績工場の増鍾をやめるよう服部兼三郎へ助言し、一九二〇年六月、服部兼三郎の葬儀に参列するなど、服部商店への経営には深く関与していた。以後、矢田は服部兼三郎の後継者・三輪常次郎を支援した。三輪常次郎『當用日記』一九一九年七月八―九日。
- (48) 『財団法人 名古屋公衆図書館設立概要』、二頁。
- (49) 矢田績『懐旧瑣談』財団法人名古屋公衆図書館、一九三七年、一三二―一三三頁。
- (50) 杉浦英一『中京財界史』中部経済新聞社、一九五六年、三六〇頁。
- (51) 福沢桃介と矢田績は、ともに性格が強かったために、矢田績が名古屋に復帰した際も、「不即不離」の関係にあったという。杉浦英一『中京財界史』中部経済新聞社、一九五六年、三六〇―三六一頁。
- (52) 矢田績『懐旧瑣談』財団法人名古屋公衆図書館、一九三七年、一三四頁。
- (53) 矢田績『懐旧瑣談』財団法人名古屋公衆図書館、一九三七年、一二四頁。
- (54) 『財団法人 名古屋公衆図書館設立概要』、二―三頁。
- (55) 「はなやかに咲いた 名古屋市文化の華 完備せる公衆図書館」『名古屋新聞』一九二五年四月一日。
- (56) 「名古屋市民に精神の糧を与へる 名古屋公衆図書館いよくけふから開館」『新愛知』一九二五年四月一日。

- (57) 「名古屋市民に精神の糧を与へる 名古屋公衆図書館いよ〈けふから開館〉」『新愛知』一九二五年四月一九日。
- (58) 三輪常次郎『當用日記』一九三三年三月七日。
- (59) 三輪常次郎『當用日記』一九三六年三月二五日。
- (60) 矢田績「岡本櫻君を思ひて」『名古屋新聞』一九三六年七月一〇日、野依秀市『岡本櫻伝』実業之日本社、一九三八年。
- (61) 矢田績『穿き違への日本 附たり名古屋小言』扶桑社、一九三三年。